

ブライス先生を想う

佐藤千春

昭和39年10月28日、この年の春より病氣加療中だった先生が逝去された。11月1日、学習院大学旧図書館に於いて教職員、多くの卒業生、在校生が参列する中、葬儀ならびに告別式が行われた。当時、大学3年だった私も英米文学科の学生を代表してブライス先生の追悼の言葉を捧げたことを記憶しております。この時の想い、そしてわずかな期間ではありましたが先生にご教示を賜ったことなどを偲びながら、今こうして再びペンをとる機会をいただきましたことに何か不思議な巡り合わせを感じております。

「いまだ生を捨てざれども、今すでに死を見、いまだ死を捨てざれども、今すでに生を見る」一道元禪師が54歳の短い生涯の中で残した書物、正法眼蔵。大学生だった私はこの難解な書物にふれるたびにブライス先生の授業が思い出されたものでした。先生がたびたび口に出されたZen「禪」という言葉、すべて英語での授業のため、聴き取るのがやっとではありましたが、それでも単語の片々をつなぎ合わせていきますと何故か理解できるような気持ちになっていました。多少なりとも私の中に「禪」への関心、志向性があったからでしょうか。「禪」は私どもの日常生活の中にあっても質朴に、しかも強靱に自然と一体となって生き続けています。私どもは多忙な現代の生活の中にあって、ほんの一瞬でもよいから自己内省の静かな時間を持ちたいものです。「禪」における坐禅はその現れでしょうか。坐禅は行の基本形態ではありますが「悟り」のための手段ではなく目的そのものなのでしょう。それはそれ自体、修行であるとともに「悟り」の境地でもあるのでしょうか。仏教において釈尊の説かれた教えはすべて体験から生まれたものだとわれております。そして体験とは身も心もあげて、ものを内側から直に、しかも全体的に捉えることでしょうか。精神を統一させ、真摯な努力、精進によって捉えるのでしょうか。そしてその体験の基本が坐禅ということになるのでしょうか。ですから仏教で坐禅を離れた教えは一つも無いといってもよいのでしょうか。「禪」における坐禅はその行の瞬間に仏が我に現成しているのによ

う。ブライス先生がしばしば直観的洞察力 (intuition) と言われていたのはこのことだったのででしょうか。自己の魂を正視し、これを清く育て上げていく—私はこうした「禅」の精神の中にブライス先生の心を見出せるような気持ちになります。

エマソンの作品『自然論』(1836)には「荒れ地に立ち、頭を快い大気に浸し、限りない空間の中にもたげる時、卑しい利己心はことごとく消えてしまう。私は透明な眼球となる。私は無であり、一切が見える。普遍なる者の流れが私の中をかけ巡る。私は神の一部である」とあります。まさにこれは禅の境地ではないのでしょうか。ブライス先生の『禅と英文学』(北星堂)にはエマソンにふれた箇所がいくつか見られます。その中でエマソンの詩「個と全体」(“Each and All”)について述べてあるページ (p.172) があります。先生はそこで次のような詩句を引用されております。

I wiped away the weeds and foam,
I fetched my sea-born treasures home;
But the poor, unsightly, noisome things
Had left their beauty on the shore,
With the sun and the sand and the wild uproar.

私は泡にまみれた海草を抜き取って
海で生まれたその宝物を家に持ち帰った。だがそれは太陽と砂、荒々しい
海鳴りの音とともにその美しさを海辺に残したままで、あとにはみすぼら
しく、見苦しい、悪臭のするものがあるだけだった。

事物の存在の意義は、その周りのものとの関連性の中にあるのであって、何一つとして唯一、孤立していて美しいものはない、という全体と個が結び合った時の美しさが述べられているのでしょうか。まさにこれも禅の境地と深く関わっていないのでしょうか。

ブライス先生の意図されたこととは異なるかも知れませんが、先生が引用された次のようなテニソンの詩の一節 (p.67) は上述したエマソンの詩とは対照的だと私には思われます。それは「壁の割れ目に咲いた花」という詩です。

Flower in the crannied wall,
 I pluck you out of the crannies;--
 Hold you here, root and all, in my hand,
 Little flower--but if I could understand
 What you are, root and all, and all in all,
 I should know what God and man is.

壁の割れ目に咲いた花

私はお前を割れ目から引き抜いた。

今こうしてお前の根ぐるみ一切を私は手の中にしている。

小さな花よ、だがもし私がお前のことを、根ぐるみを、何もかもをすべて理解できたなら、その時こそ私は神と人の何たるかを知ることになるろう。

人であれ、ものであれ、それがあべき場所、あるがままにおいてその独自性があると言えましょう。花を「引き抜く」ことは、その「あべき場所」を覆すことではないでしょうか。エマソンも海草を抜き取りました。しかし彼はそこに「美しさはなくなった」と直観しました。テニスンはどうだったのでしょうか。「引き抜く」行為は花にとって死を意味する以外の何ものでもありません。詩人テニスンにとってそのような生命の存在など微々たるもので、花の本質を知ればよかったのでしょうか。愛おしい花の生命に換えてまで「本質」とはそれほど大切なものなのでしょうか。ただ自己の知的好奇心、関心を満足させればよかったのでしょうか。そのような疑問がふと湧いてきます。現在、私はエマソンの作品と取り組んでおります。その中にはブライス先生のお言葉を彷彿させるものもあります。今一度先生のご講義を拝聴し、先生のお考えにふれることができればと願わずにはおれません。

先生がご逝去された季節は、大学北1号館の庭の木々の葉が散り始め、厳しい冬の来るべき様を見せておりました。あの青く澄んだ、人を射るような、それでいてどこか温かく親しみの湧く眼差しをしたブライス先生が、あの当時と同じようにショルダーバッグを肩にかけ、ゆっくりとした足取りでやって来るような、そのような気がいたします。